

## 専門職の女性の職業経歴とライフイベント — 職業構造基本調査の匿名データを用いた分析から —

深井 綾乃 (お茶の水女子大学大学院)

### 1. 背景と目的

近年、専門職で働く女性が増加している。専門職に従事することは女性のキャリアに寄与することが示されてきた。「女性とキャリアに関する調査」では、初職を継続している女性における専門・技術的職業の割合が大きいことが報告された(三具 2012)。また、ライフイベントとの両立に関して、出産後の就業継続、再就職といった面で女性のキャリアに有利に働くことが示されてきた(坂本 2009; 西村 2014)。その一方で、専門職と就業を関連は一樣ではなく、性別比率による違いがあることが指摘されている。職業の中分類レベルの分析から、女性比率の高い看護師などの医療・福祉専門職において同一職種への転職しやすい傾向がある(例えば、小松 2019)。

このように専門職では、転職した場合においても前職の専門性を引き継ぐことが可能であるが、結婚や夫の転勤への帯同の経験が女性のキャリアとどのように関連しているのだろうか。本研究では、専門職の女性の前職と現職の職業経歴に着目し、職業経歴を分類するとともに、そうした分類と婚姻状態、居住地の変化の関連を明らかにしたい。あわせて、大分類の職業分類では把握できない専門職の中での差異について産業分類を用いて検討する。

### 2. 方法

本研究では総務省「平成 29 年度就業構造基本調査」の匿名データを使用する。学卒後の 20 歳以上 64 歳以下の女性で、初職の専門職を継続している場合、もしくは前職が専門職である場合を分析対象とした。就業構造基本調査の匿名データでは、現職は職業詳細区分が提供され、詳しく知ることができる一方で、前職は職業大分類の提供にとどまる。そのため、職業を把握する代理指標として産業分類を用いる。

### 3. 暫定的な結果

現職の職業と前職の職業をもとに、職業経歴を、①初職の専門職を継続(初職継続型)、②専門職から専門職への転職(専門職転職型)、③専門職から専門職以外の職業への転職(他職転職型)、④専門職から離職(現在は無業)(離職型)の4つのパターンに分類した。「転職型」には休職期間がある再就職のようなケースも含まれる。分析対象に占める割合は「初職継続型」65%が、「専門職転職型」が18%、「他職転職型」が10%、「離職型」が7%ほどであった。現在も専門職で働いている(①+②)のは8割超で、専門職の定着度の高さが窺える。

記述的な分析から、産業分類と職業経歴の関連をみると、「医療・福祉」は「初職継続型」「専門職転職型」で7割ほどを占めるが、「他職転職型」「離職型」では半数程度である。対して、「情報通信業」「学術研究、専門・技術サービス業」では、相対的に「他職転職型」「離職型」で割合が高い。

多項ロジット分析の結果、「未婚」と比較すると「配偶者あり」「離別・死別」で初職を継続しにくい傾向が見られた。また、「家族の仕事の都合」での転居を経験した場合に、初職の継続確率が低い傾向にあり、離職と結びつきやすいことも確認された。

#### 【付記】

二次分析にあたり、統計法に基づいて、独立行政法人統計センターから「平成 29 年度就業構造基本調査」(総務省)に関する匿名データの提供を受けた。また、本研究は、日本学術振興会(JSPS)特別研究員奨励費(課題番号:23KJ0963)の助成を受けたものである。

#### 【文献】

小松恭子,2019,「出産離職後の再就職—職種と就業形態に着目して—」『人間文化創成科学論叢』22:203-213.

西村純子,2014,『子育てと仕事の社会学—女性の働きかたは変わったか』弘文堂.

坂本有芳,2009,「人的資本の蓄積と第1子出産後の再就職過程」『国立女性教育会館研究ジャーナル』13:59-71.

三具淳子,2012,「誰が初職を継続しているのか」『女性とキャリア』現代女性キャリア研究所 4:95-110.

(キーワード:専門職, 職業経歴, 婚姻状態)